

特別講演：アルゴリズム・コンポジションの（不）可能性

三 輪 眞 弘^{†1}

Special talk: (Im)possibility of Algorithmic Composition

MASAHIRO MIWA^{†1}

「作曲」という概念はおそらく西洋音楽固有のものであり、今風に言えば「音楽におけるイベント・シーケンスをある個人が決定し記述する行為」のことを示している。音楽創造の領域におけるデジタル技術の援用例では、「アルゴリズム・コンポジション」という言葉で呼ばれる、「イベント・シーケンスの決定」を人間ではなく、コンピュータを使って行う試みが昔（コンピュータの誕生以来）から知られてきた。しかし、その可能性を「真に受ける」作曲家や聴衆は世界中、皆無に等しいと言えるだろう。なぜなら音楽作品において、ある音が選ばれた理由すなわち音の起源は、必ず作曲家の精神性や感性に求めるしかなく、論理演算によって選ばれた音など「音楽」と呼ぶに値するはずがないと固く信じられてきたからである。この「信仰」に従えば、音楽創造におけるコンピュータの位置づけは必然的に、主体的に思考する人間（作曲家）を助ける「道具」ということになる。事実、「コンピュータ音楽」と呼ばれる分野の主流は今も昔もデジタル信号処理、すなわち音色（音声信号）に関する様々な試みである。言い換えればそれは、人間が近年初めて手にした新しい「道具」の可能性に違いない。

しかし、そうなのだろうか？現代に生きるぼくらはたかだか 200 年前の西欧で生まれた

音楽というものに対するこの「信仰」を今でも無根拠に受け入れるべきなのだろうか？「方法主義」、「逆シミュレーション音楽」、「新調性主義」などのキーワードで私が試みてきたアルゴリズム・コンポジションにおける様々な活動は、一貫してこの「信仰」に対する異議申立てであった。今回は、それらのコンセプトのみならず、近年試みてきた「新調性主義」やその拡張としての 17 音平均律アルゴリズムなどの事例を紹介したい。

科学と音楽/芸術、俗にいうなら理系と文系と言っても構わないが、音楽情報科学研究会もまたそうであるように、これらふたつの領域の接点を見出し、ある種の「融合」を目指した取り組みが、当然のことながら、数多く試みられてきた。しかし、おそらくまったく異なるこれらの人間の「知のあり方」に接点など本当にあり得るのだろうか？いや、そのように問うことはとても滑稽なことに違いない。なぜなら、西欧の語源を調べるまでもなく、ぼくらの誰もが個々人において総合的な「ひとつの知」を頼りに日々を生活しているのだから。ならば、なぜ人間の知は分断され、互いに「まったく異なる」もののように思考されなくてはならなかったのか？その理由はさておき、おそらく、先に述べた音楽に対する強固な現代人の「信仰」もまた、そのことと深く関わっているに違いない。

アルゴリズム・コンポジションという論理学と音楽用語が組み合わされた、あり得ないような造語がまさにそのような事態を超克すべく生まれてきたと感じているのは、私だけかもしれない。しかしどちらにせよ、論理的であることと人間的であることの間を埋める新しい言葉（概念）をぼくらは今、何としても必要としていることを、放射性物質と共に暮らし始めた日本人の誰もが感じているのではないだろうか？（もちろん、それは「人間的であること」とはそもそもどのようなことなのかを確認していくことでもある）そして、私にとってそれは、全面的にテクノロジーに依存して生存を始めた人間にとっての「音楽」そのものを再定義することであり、今回紹介する、その実証実験としての「音楽」の実践に他ならない。

^{†1} 情報科学芸術大学院大学
IAMAS